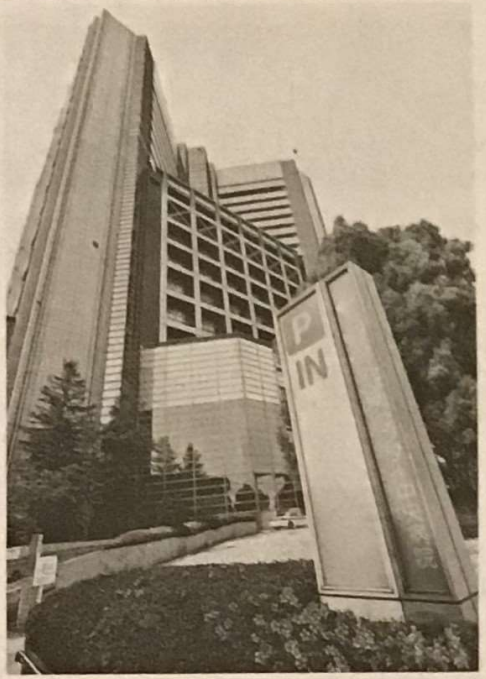
東京新聞　（第3種郵便物認可）

がん患者の接種効果検証

国立がん中央病院

国内初、1200人の抗体計測

国立がん研究センター中央病院（東京都中央区）は、新型コロナウイルスワクチンをがん患者に接種してどのくらい効果が得られているかの検証を始めた。同病院で診療を受ける患者約千二百人を対象に最長で一年間、感染を防ぐ抗体の量などを測り、がんの種類や受けている治療によって違いが生じるかどうかを調べる。がん患者のワクチン効果を調べる研究は国内では初めて。



国立がん研究センター中央病院＝東京都中央区で

新型コロナ

研究を担当する同病院先端医療科の勝屋友幾医員は「調べた結果は参加者に伝える。十分な抗体ができていると分かれば安心できるし、リスクが高めだと分かれば対応を考える重要な情報になる」と話す。

数十人の患者を対象にした英国の研究では、ファイザー製のワクチンを二回接種した後に十分な抗体ができていたのは、大腸がんや肺がんなど固形がんの患者では95％だったが、白血病やリンパ腫といった血液がんの患者では60％だった。参加者が少なくさらなる検証が必要だが、免疫に関わるリンパ球を減らす抗がん剤治療が影響している可能性がある。

新たな研究では、固形がんの患者五百～千人、血液がんの患者百～二百人に協力してもらう。ワクチン接種前、二回目接種の一カ月後、半年後、一年後を目安に抗体の量などを調べる。比較対象として、同病院の医療従事者約二百人も参加する。接種するワクチンは主にファイザー製になる。

接種した部位の腫れや発熱のような副反応の程度も患者と医療従事者で差はないかどうか調べる。接種から一カ月後のデータが集まったら年内に中間結果を発表する予定。

がん患者の接種効果検証のポイント

- 約1200人を対象に最長１年間、感染を防ぐ抗体量を計測
- 接種前、２回目接種の１カ月後、半年後、１年後に調査
- がんの種類や治療で効果に違いが生じるかを調べる
- 主にファイザー製ワクチンを使用
- がん患者のワクチン効果を調べる研究は国内初